

10 X knife 治療

次の手段の探索

2月早々にT病院を退院してすぐG病院のA医師の診察を受けた。A医師は手術の後では、「大腸癌にあまり有効な抗癌剤はないので、抗癌剤治療は行わない。」と述べて、手術後の楽しい日々を送らせてくれた。多分その後の経過から見て、このときに転移の予防として5FUを投与していても、身体にきついで何の効果もなかったと思われる。しかし今度は、藁をも掴む必要があるからか、私たちが「担当医の顔は二度と見ない。」と決めていたにもかかわらず、しきりとCPT11による治療を勧めた。消化器内科の担当医との間もA医師がとりなすとのことであった。

わが家ではsecond opinionのこともあり、もし抗癌剤治療をすとしても転院して受けたいと考えた。「T病院では抗癌剤治療はできない。」とS医師に聞いていたので、A医師に抗癌剤治療を含めてX線による治療の実績が高い、K病院への紹介状を書いてもらった。この病院は5万円のsecond opinionをもらったH医師のご推薦の病院である。

X knife 治療は受けられなかった

CT等すべての資料を揃えて、K病院の放射線治療科を受診した。K病院には日本ではまだ数が少ない追従型X knifeによる体部への照射治療装置があり、高度先進医療として指定を受けている。肺は呼吸で動くため、精密なNC工作機械と同じ機構を使って、X線を身体の動きに合わせて追従させる機能を持っている装置である。もちろん、従来の放射線治療のように身体にマジックで印を付けてそのあたりにおおざっぱに放射線を当てるという、副作用が大きい治療ではなく、CTやMRIなどで確定した癌の転移巣だけに、X線の照射方向とその強度をcomputer simulationの結果通りに当てるという先進的なknifeといわれる治療法である。

残念ながら放射線治療科の判断は「30mm大までで片肺3個までがこの治療の対象であり、たとえ10mm程度と小さくても、片肺で10個あると、癌の周辺をX線が害してしまい、全部を治療すると肺の能力が足りなくなってしまうので、このままでは治療できない。」ということであった。そこで、同病院の内科で抗癌剤治療を施して、肺の転移巣が治療の条件を満たす状態になったらX knife治療を再度検討するというので、内科を紹介された。

K病院への転院して抗癌剤治療を受けるのはあきらめた

5万円のsecond opinionでは、K病院の抗癌剤治療はいろいろと研究していて効果がある人もいる、とのことだったので「所期の目的は達成された。」と考えて内科を受診した。内科の医師は当然ながら「G病院で抗癌剤治療を受けて腫瘍が縮んでから、再度放射線科へ来院したらどうか。」と言ったが、転院したい旨を主張したら過去の抗癌剤の投与記録を貰って来てくれということで、治療を受けられることになった。

肺の転移が数個だったらこのX knifeで一旦は治癒し、他の転移が出たらまた治療を続けるという手段で数年の寿命を保てたと思う。しかし、妻の場合肺転移の数が多すぎた。肝臓を切除した際に飛び散ったのか、あるいは手術前にすでに広がっていたのかは分からないが、後者だとすればN病院での検査の遅さ、定期検診の受診遅れの何れも悔やまれてならない。このときほど「健康は時間で買える。」という言葉が、落ち込んだわが家に響いたことはない。

肺転移が発見されても、数が少なかったり大きさが限度内の人には、この治療法はこことは別のK病院で研究されている冷凍治療法と共に今後期待される治療法である。癌は小さい内に発見して何らかの方法で取り除けば、転移が出る可能性も低く、おできと変わらないものであ

る。異変が感じられる前から少しでも機会があれば検査を受ける必要性がよく理解できた。

K 病院での抗癌剤治療は結局行わなかった。理由は妻が「命が半年しかなくてもかまわないから、もう抗癌剤で死んだような日々を送るのはいやだ。中国へ行けない。」と主張したからである。抗癌剤治療による肺転移の縮小の可能性を期待するか、確実に可能な中国行きを取るか、である。前者は可能性でしかなく、すでに 5FU が効かない場合は CPT11(イリノテカン)も 20%以下の有効性しかない、という data は internet から得ている。しかも、X knife 治療を受けるには、一部の転移巣は消滅しないとだめであるので、可能性はもっと低くなる。

あと半年だけの命を選択した後で

この選択をした時点で、妻の命は長くても半年と決定した。しかし、中国へは確実にに行けることになった。妻はこの時点で、春までと思って用意していた死に装束を、夏物に入れ換えたようである。

妻の寿命を限るような 2 月の末の決定は私にとってたいへん辛かった。残った時間は妻のすべての希望を叶えて過ごそうと思った。時間がもったいないので、事務の態度が悪い都立高専の非常勤講師は辞めようと思って妻に相談したが「授業開始が迫っているので、世の中に対する責任だから続けなさい。それが私の生きることへの励みになる。」と言われて今年度は踏みとどまった。ところが案の定、今年の 12 月に入って「先生の科目は今後内部の教員がやりますので来年度からはお断りします。」という無礼極まりない電子 mail が送られて来た。そんなことは、今年度が始まる時点で分かっていることなので、先に言ってもらえれば妻のそばにより長くいられた。「利用できるだけ利用して、ポイだな。」と理解した。やはり「授業などは放り出して、妻が願うことをすべてしてやることに専念することが、残りの命を限られた人間への正しい責任の取り方だ。」とこの都立高専の仕打ちを受けて思った。

この項終了

©2003 Dr.YIKAI